

開催地名	高知県佐川町
開催日時	令和7年11月30日(日) 14:00 ~ 16:00
開催場所	健康福祉センターかわせみ
語り部	犬飼 一博(愛知県名古屋市)
参加者	佐川町自主防災組織連絡協議会 47名
開催経緯	佐川町では、自主防災組織連合の活性化のために何かないかと考えていたところ、県から防災プロジェクトのお話があったので手を挙げた。
内容	<p><b>【大雨から大切な命を守る！逃げ遅れゼロに向けた防災啓発】</b></p> <p>(1) 佐川町が抱える課題          コロナ禍以降、自主防災組織の活動が衰退しつつあり、住民の防災意識向上の底上げが課題であるとのことから、今回、当研究所の取組を中心に、過去の水害やその教訓も含め、自主防災組織の活性化に繋げることを目的に講演を行った。</p> <p>(2) 逃げ遅れゼロに向けた取り組みとその背景          近年、全国各地で甚大な水害により、逃げ遅れによる被害が多発している。中部地方では東海豪雨以来、広域的な大規模水害が発生していない。また、災害を経験していないことが避難の遅れに繋がっているというデータもある。そのような状況を踏まえ、デジタル技術を活用したVRによる浸水疑似体験や人気ゲームソフトを活用した啓発動画、アナログ媒体による「大雨に備えるピクトグラム」などトレンドを意識した啓発ツールを用い、防災に興味のない人を始め、大人から子供、障がいのある人まで、より多くの人に早期避難の重要性が伝わる防災啓発に取り組んでいる。VRによる浸水疑似体験は、大雨特別警報が発表されても避難を躊躇して逃げ遅れる家族をモデルとして、逃げ遅れによる被害を疑似体験するもので、特別警報を待たずに早期避難を促すことを目的としている。</p> <p>また、特に重点を置いて取り組んでいるのが防災教育支援である。今後、社会資本整備に携わる土木系の学生を対象に防災講座を行い、過去の水害や備えを学び、避難インフルエンサーとして「守られる人から守る人へ」の意識の醸成を目指し、取り組みを始めた。その後、小・中学校・高校・大学へと拡大し、講座を受講した人数は約17,000人(令和7年10月末現在)となった。また、インクルーシブ防災の取組として、特別支援学校での防災講座や視覚障害のある方に向けた防災啓発冊子の点字版や音声版の作成も行い、中部管内の聾学校や点字図書館に寄贈している。VRや映像による浸水疑似体験は、水害の恐さが伝わり、水害を自分事として捉えるきっかけになる。特に若年層には受け入れやすく有効である。更に、より実践的な学習として、各自が、水害に備えた防災行動計画「マイ・タイムライン」の作成も行っている。また、AIを活用した「伊勢湾台風A</p>

I 語り部」は、伊勢湾台風から 66 年が経過し当時を伝えられる人も少なくなっている中、災害体験者による口頭や当時の記録による文書での伝承では無く、A I 語り部により伝承するシステムである。防災は、過去の災害を知ることから始まる。住んでいる地域の地形や地質は変わらない。過去に水害が起きたところは、再度起きるかもしれないことを認識し、地域で起きた水害を学んで、発生し得る水害をイメージすることと当時の行動や対策を学ぶことが今の備えに繋がる。

### (3) 過去の水害とその教訓

高知県は台風の上陸数が多く、室戸台風や第二室戸台風などで甚大な被害を受けている。昭和 34 年の伊勢湾台風では全国で 5,000 人以上の命が失われたが、高潮による被害が大きく、愛知県・三重県では海拔ゼロメートル地帯という濃尾平野の地形も被害を拡大させた。高知県では、雨量は既往の台風に比べ少なかったものの、大型台風であり進路が高知県東部に近かったことから高波による被害が多く、特に室戸市、東洋町で甚大な被害を受けた。佐川町では大きな被害はなかったが、近年でも類似の進路を辿る台風もあり、平成 30 年の台風 21 号では関西空港が浸水するなどの被害が発生した。たまたま自分たちの住む地域で災害が発生していないだけであり、他地域での水害も自分事として捉えることが大切である。

また、佐川町では、昭和 50 年 8 月 17 日の台風 5 号で、1 時間に 108 ミリ、日雨量 623 ミリの記録的な集中豪雨に見舞われ甚大な被害が発生している。町内には、当時の浸水深を表す表示板も残されている。こうした痕跡から被害の状況を確認・伝承することも重要である。また、その翌年の昭和 51 年 9 月の台風 17 号では、近隣の高知市で総雨量 1305 ミリの大雨となり、高知市では甚大な被害が発生した。中部地方においても、その豪雨では、長良川が決壊し「9.12 豪雨（安八豪雨）」と呼ばれる甚大な被害が発生している。

近年、全国各地で台風や線状降水帯による大雨が多発しており、いつ、どこで水害が発生してもおかしくない状況である。25 年前に 200 万都市名古屋を襲った都市型水害である東海豪雨も線状降水帯によるものである。近年の気象変動により洪水の発生頻度は高まると予想されている。過去の水害に学び、住んでいる地域のリスクを確認しておくことは重要である。

また、甚大な被害を及ぼす台風や大雨は予測が可能であり、事前に備えをして速やかに避難をすることで大切な命を守ることができる。

町内を流れる日下川流域は、令和 6 年 12 月に特定都市河川及び特定都市河川流域に指定されて今後対策が推進される。中部地域では、学校と地域と連携した取組や地域独自の取組を進めている事例もある。ハード整備だけでは防ぎきれない

	<p>水害発生のリスクが高まっていることを念頭に、流域に住むあらゆる関係者全員が知恵を出し合って「流域治水」を進めることが重要であり、自主防災組織の果たす役割は大きい。</p> <p>(4) 最後に  「自分の命は自分で守る」「大切な人の命を守る」ため、①事前に備えることとして、非常食や避難用品などの準備、ハザードマップで住んでいる地域の災害リスクを必ず確認すること②情報収集として、災害・防災情報に敏感であること、そして普段から情報収集に慣れておくこと③万一に備えて避難場所や避難ルートを予め決めておき、早めに避難することが大切である。それと共に、周りの人たちに「逃げて」の声掛けができる避難インフルエンサーとして、“守られる人から守れる人”になって頂ければ、少しでも大切な人の命を守ることにつながる。本日、体験して頂いた浸水疑似体験VR・映像は「1minute1second (ワンミニット、ワンセカンド)」とタイトルを付けている。これは、1分でも1秒でも早く避難して欲しいという思いを込めて付けたタイトルなので、今後、大雨の時期には今日のことを思い出し、大雨から大切な命を守ることに繋げて頂ければ幸いである。</p>
開催地より	<p>佐川町も昭和に、台風による甚大な被害を受けた地域であり、ここ最近は自然災害に見舞われたことがないのでこの機会にまた気を引き締めて南海トラフや昨今の異常気象に対する対応を見直していきたい。</p>

